

万葉歌人

柿本人麿を追って

◇13◇

梅原猛氏の新説

◎大田市西のほうに、五
十猛町大浦の大岬(おみまさき)
は昔「辛乃崎」といった。瀨原
郡が五十猛であったという説も
郡仁摩町宅野の岬島からは北東
へわずが四町の地点である。
「水底の歌」の著者、梅原猛氏
はこの大岬に着目したのは二年
ほど前である。旅行の途中、岬島
の現地調査に立ち寄った梅原氏
は、その足でここを訪れた。昨
年十一月にもまたやってきた。
そしてこの大岬が昔は辛乃崎
柿本人麿、石見園より妻に別れ
て上り来る時の長歌
つゝめさかふ 石見の海の 言さ
へく 辛の崎なる いくりにぞ
深海松生ふる 荒磯にぞ 玉藻は
生ふる 玉藻なす 磯きほし尾を
深海松の 深めて思へど さ夜
し夜は いくたもあらず 延み登
の 別れし来れば 肝向ふ 心を
痛み 思ひつつ 願みすれど 大
舟の 渡の山の 黄葉の 散りの
乱りに 妹が袖 さやにも見え
妻隔子 墨上山の 雲間より
渡らふ月の 憎しげども 暁のひ
来れば 天つたふ 入日さしぬれ
丈夫と 思へる吾も 激揚の
衣の袖は 透りて濡れぬ

といった人麿をまつた神社
わりはない。
首抜ける人麿像
◎この梅原氏の「新説」を
裏づけるような資料が、このほ
かにある。

◎地元の旧家、林正幸さん(81)が
見つけた。終点である高角山は、
五十猛郵便局長宅で見つか
る。縦四十六丈、横三十七丈
の杉板を二つ折りにした歌板
である。それには「丸山に安置せる
説を修正したわけだが、辛の崎
が岬島であれ大岬であれ、流人
歌神丸の御像は杉材にて五寸
五分の厚さなり。伝えて曰く、
としての入麿が東から西へ旅を
納せられし三百体の一なり。

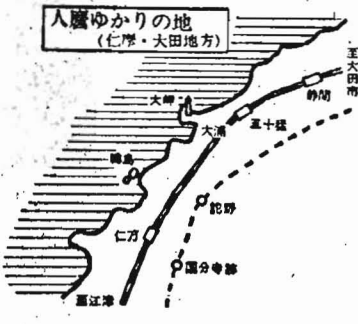
昔、正定寺の住職
台座上人(元禄年
間の高僧)が京よ
り持ち帰りて祭祀
せられたが、明和
(一七六四―一七
七二)の冬、風雪
にて社殿がこぼ
れ、丸山に奉遷し
た。いまなお辛の
崎人丸社といふ
と書いてある。

これは、林氏の

昔、頂上に人麿神社

四代前の通久氏が明治二十五年
三月、人麿の像を大岬にある同
家の菩提寺、正定寺から自願内
の豊湖園集山の祠に移した際、
像の由来を記したものである。はじめ
大岬の人麿神社に安置された人
麿像は二百年前の暴風で社殿が
こわれたため正定寺に移され、十
次に林家の邸内に移され、十年
くらい前まで同家に保存されて
いた。「容貌温和、古色蒼然精
すばり抜けた。博士は驚いて
巧神に入る」と、通久氏はこの
像の印象を語っている。
昭和八、九年ごろ、有名な歌
人、國文學者の佐々木徳綱博士
が平泉したとき、林さんの祖父
愛吉さんは松江から益田に向か
う途中で博士をとらえ、この像
を見せた。すると博士は「首が
抜けるか」という。首を引は
びと五十猛港に出る。港の東端、
と、いわれる通り首の部分
すばり抜けた。博士は驚いて
須佐之勇命の子、五十猛命が朝
鮮半島から樹木の種を持ち帰
ったとき、ここに上陸したと伝
えられた。このことが昔は辛乃
崎といわれたという。岬島の地名
の由来とさういふ。そうい
えば、高き六十尺のゴツゴツした
岩山に松が生い茂って、その
ももていられる。透るのは岬が
、陸続きという点付だが、地元
の人はこれを「大岬」とも呼ん
でいるから、もとは岬島と同じ
ように島だったのかもしれな
い。

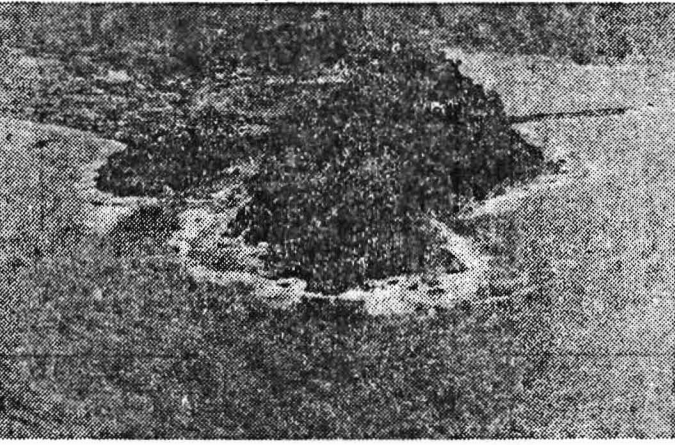
◎「國道九号線の五十猛トン
ネルを西へ抜けて、しばらく走
るとから海側へ下りる坂道を進
むと、五十猛港に出る。港の東端、
海へ突き出たところが大岬だ。
須佐之勇命の子、五十猛命が朝



人麿ゆかりの地 (七津・大田地方)
大岬、五十猛、岬島、大浦、仁方、高角山、正定寺、台座上人、高僧、明和、一七六四、一七七二、風雪、こぼれ、丸山、奉遷、いま、辛の崎、人丸社、書いてある、林氏の

大岬

空から見た大岬。岬突端が大岬鼻、後方は五十猛漁港



裏づける資料も発見

大岬灯台のほかに、東には
高根半島、西にははるか益田あ
たりまで望むことが出来る。人
麿もまたこの岬山に立って遠く
大和の都をしのび、来し方行く
末に思いをはせたのだろうか。
彼のかたわらには奇り添うよう
に依羅娘子の姿があったのかも
しれない。海をわたる風に吹か
れていると、ふとそんな幻想に
かられるのである。